

学園だより

地方競馬益金事業
No.16
1984年6月1日発行
財団法人
中国四国酪農大学校
電話 086766-3651



雪の蒜山三座と大学全景（昭和59年3月）

酪農の原点に帰ろう

校長 石田正之

今、ひるぜんの地は、今年の異常な大雪から遅い春を迎え、一気に初夏へとといった陽気が続いており、毎日爽やかな新緑と、にぎやかな小鳥達の声に包まれております。

卒業生の皆さんをはじめ、旧職員の方々には如何がお過ごしでしょうか。今年の四月の人事異動で二度目の酪農大学校への勤務となりましたので、よろしくお願い申し上げます。

十年一昔と申しますが、前回の勤務から丁度十年目となり、大きく変貌している酪農大の御苦労の賜ものと感謝いたしますとともに、これからのが国の酪農の抱い手を育成するという大役に、責任の重大さを身にひしひしと感じており、職員や在校生と一緒に頑張りて行きたいと思っております。

昨今のわが国の酪農は依然として厳しい経営環境にあることは皆さんよくご承知のこと

とでございます。急速な規模拡大から、飼料の自給度の低下、糞尿の土地還元の出来ていないこと、借入れ金の増大、多頭技術の不備から繁殖障害など疾病の多発や収益性の低下をまねくなど、数多くの憂慮される点があげられております。

西欧諸国では「家畜なければ農業なし」といわれておりますが、古い歴史の中で育ってきた西欧諸国の酪農と異なり、わが国の酪農は、高度経済成長体制の中で特異な発展を示しているものといえます。

酪農経営の原点は、太陽エネルギーを利用した土地からの飼料生産と、乳牛の生産力を有機的に結びつけ循環させるサイクルの中で、生産される乳や肉などを利用し、地力を維持していく農業経営であるといえます。

今後のわが国の酪農のあるべき姿を考えると、社会経済が高度成長から低成長へと移行しているとはいえ、経済

もくじ

巻頭言	
酪農の原点に帰ろう	
校長 石田正之	1
提言	
E・T CENTER	
オオサンショウウオ	2
第二回全日本ジャーシー共進会	3
牧場だより	
第一牧場	3
第二牧場	4
特別寄稿	
第八期卒業後十周年記念同窓会に出席して	
岡山種雄牛センター	
永井 仁	6
酪農ギャルの学園日記	
第十八期卒業生	
坪井恵子	8
大学校日誌から	10
人の動き	11
昭和五十八年度（第十八期生）	
卒業生名簿	11
昭和五十八年度（第十九期生）	
入学者名簿	12
昭和五十九年度（第二十期生）	
入学者名簿	12
意向調査の実施	12
編集後記	12



酪農の道

合理性を優先する経済社会の中にあって、石油エネルギーをはじめとして資源の枯渇が心配される今日、今後わが国土の上で永久に再生産を続けることの出来る酪農に対し、新しい価値観を創造し、酪農の原点に帰って再編していく必要があると思われ、大きな

希望と期待を持つものであります。酪農の原点に帰り、わが国の酪農の安定をめざして、国民の皆さんに良質の牛乳を安定的に供給するという、生命産業を営むほこりを持って、皆さんとともに頑張ってくださいたいものです。

E. T. CENTER

とかく季節感の薄らいだ都会にくらべ、四季の移り変わりもあざやかな蒜山から近況を……。

最近の酪農情勢を反映してか当校入学希望者の減少が続き、ただ今二十期生十三名、質で勝負の時代とは言え史上最低、まことに寂しい限りです。

酪農家戸数の減少、各県の農業大学校等類似機関との競合等々、言い訳はいくらでもできますが、原因はどうも根深いようです。

開学当時はユニークで画期的な酪農後継者養成機関として脚光を浴び、一時期もてはやされた感なきにしもあらずですが、しみじみわが身(当校)を振り返って見るにつけ、魅力の衰え如何んともし難いようです。

一方、酪農の将来に思いを馳する時、大自然の懐に抱かれ「草から乳と肉を創造する」、これほど理にかなった仕事は

オオサンショウウオ

なく、健康的な職業はないように思います。

先進国に農業が栄え、発展途上国で慢性的な食糧不足が続く、日本の農業を、酪農を後退させてはならないし、他産業の犠牲にしてはなりません。まい。

酪農こそ地球上に最後まで残る産業であって欲しいと思います。

当校も財団法人に移って間もなく二十年、成人式を迎えるに当り、ここらで一部モデルチェンジなど施し、飛躍の時代を切り開きたいものです。

幸い蒜山地区は日本一のジャージー牛主産地、今年は当地でジャージー牛導入三十周年記念大会が開催され、来る九月十四日から十六日までの三日間、全国ジャージー共進会、ジャージー祭等が盛大に行われる予定です。

最盛にくらべ減少したと言うものの、現在も約一、八〇〇頭のジャージー牛が飼育さ

れ、牛乳に、チーズにと着実に需要を伸ばしております。これは地元蒜山酪農協の地道な努力に負うところ大ですが、ジャージー牛の乳質に対する高い評価は見逃せません。

ジャージー牛乳に寄せられる期待に比例して、ジャージー牛の能力(とくに乳量)向上が緊急課題となつてまいりましょう。

さて、当校の身の振り方ですが、より中味の濃い教育機関として、より具体的に地域酪農振興に貢献できるようにするため、第二牧場(三木ヶ原)をETセンターに変身させてはいかがでしょうか。ETとは受精卵移植(Embryo Transfer)の略称で、ジャージー牛の一大種畜供給基地にするものです。

これからの乳牛改良はET技術の進歩で急変が予想されます。

先般、農林水産省日高種畜牧場で、わが国初の分割卵移植に成功しました。

昨年、家畜改良増殖法が大幅に改正され、人工授精用精液及び受精卵の輸入が可能となり、家畜人工授精師にも受精卵移植業務の道が開かれました。



第2放場ロータリーパーラー

本校学生実習の場、優秀な家畜人工授精師の養成と再教育、優良ジャージー子牛の生産、払下げ、これらを有機的に結びつけ、魅力ある施設に整備充実できるなら、当酪農高等学校の附属施設としてでも、県営施設としてでもいっこうにかまいません。

「女性は化粧をしたら心まで変る」と言います。「よいサービスは良い待遇から」とも言います。

恵まれた環境と、先人達が築いてきた実績を元手に、全国に先がけて立派な施設とすばらしい教育環境を備えたE

Tセンターを完成させることができたなら、優秀な人材は自然に集ってきますし、よい成果が得られること受けあいです。

将来のわが国酪農を背負って立とうとする青年達も、当校目指して殺到してきます。

酪農関係者の技術と心の拠所として、地域住民の誇りとして、まだまだ酪農高等学校の果せる役割があるような気がしてならないのです。

記念すべき、本校設立二十周年を目前に、卒業生、OB職員、関係者一致協力して物心両面と知恵を出しあってみようではありませんか。

第二回全日本

ジャージー共進会

蒜山で開催

わが国にジャージー牛が集団的に導入されて満三十周年を迎え、ジャージー振興策の一環として各飼養県の代表牛が、蒜山の地に集まり優劣を比較検討し、改良増殖の推進に資するとともに、ジャージーの優秀性を広く展示する目的で、第二回全日本ジャージー共進会の開催が次のとおり開催されます。(第一回全日本ジャージー共進会も昭和四十三年当地川上村小学校で開催されました。)

行事予定

一、日時 昭和五十九年九月十四日～十六日

二、場所 岡山県真庭郡川上村内

三、行事 第二回ジャージー共進会

ジャージー酪農経営発表会(酪大)

全国ジャージー大会(酪大)

草地酪農向農業機械の実演展示

その他

四、主催 日本ジャージー登録協会

第一牧場

だより

卒業生の皆さん、お元気で御活躍のことと思います。

五十八年度の冬は、例年になく大雪となり四月になっても草地は雪で覆われ、草の生育にとっては非常に悪い条件となりました。皆さんの地域では、いかがでしょうか。

さて、第一牧場の現況ですが、四月の職員異動で、中山場長が教務課長となり、後任として、草苺が配置になりました。西谷先生、樋口先生、共に頑張っておりますので、お近くにおいでの際は、気楽にお立ち寄り下さい。

一、飼養頭数

昭和五十九年四月一日現在、第一牧場での飼養頭数は、表一に示しているように、乳牛は成牛四十一頭、育成牛十八頭、肥育牛は三十頭で合計八十九頭となっています。

産次別では、表二に示すような状況で、平均三・七産となっています。

二、生乳生産状況

月別の生乳生産状況は、表

三に示しましたが、総生産量は十九万七千キログラムとなり、一頭当りの泌乳量も年々増加しています。

三、自給飼料の生産について

五十八年度には、イタリアンライグラス(作付面積二・四ヘクタール)、放牧専用草地の掃除刈(六・七ヘクタール)の乾草を約三十一トン確保できましたが、今年は、前述しました雪のため、まだ調整できていません。

五十九年度の飼料作物作付計画は、トウモロコシ五・九ヘクタール、イタリアン及び麦を三・三ヘクタールを予定しており、トウモロコシは雪のため若干遅くなりましたが、



第1牧場

表1 飼養頭数(第1牧場) (昭和59年4月1日現在)

区分	成 牛				育 成 牛			合 計
	搾乳牛	乾乳牛	未經産牛	小計	12~18か月令	12か月令未満	小計	
雌	27	8	6	41	6	12	18	59
雄	—	—	—	—	20	10	30	30
計	27	8	6	41	26	22	48	89

表2 産次別飼養頭数(第1牧場) (単位:頭・%)

産 次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
頭 数	4	7	7	6	5	3	1	1	1	35
比 率	11.4	20.0	20.0	17.0	14.3	8.6	2.9	2.9	2.9	100

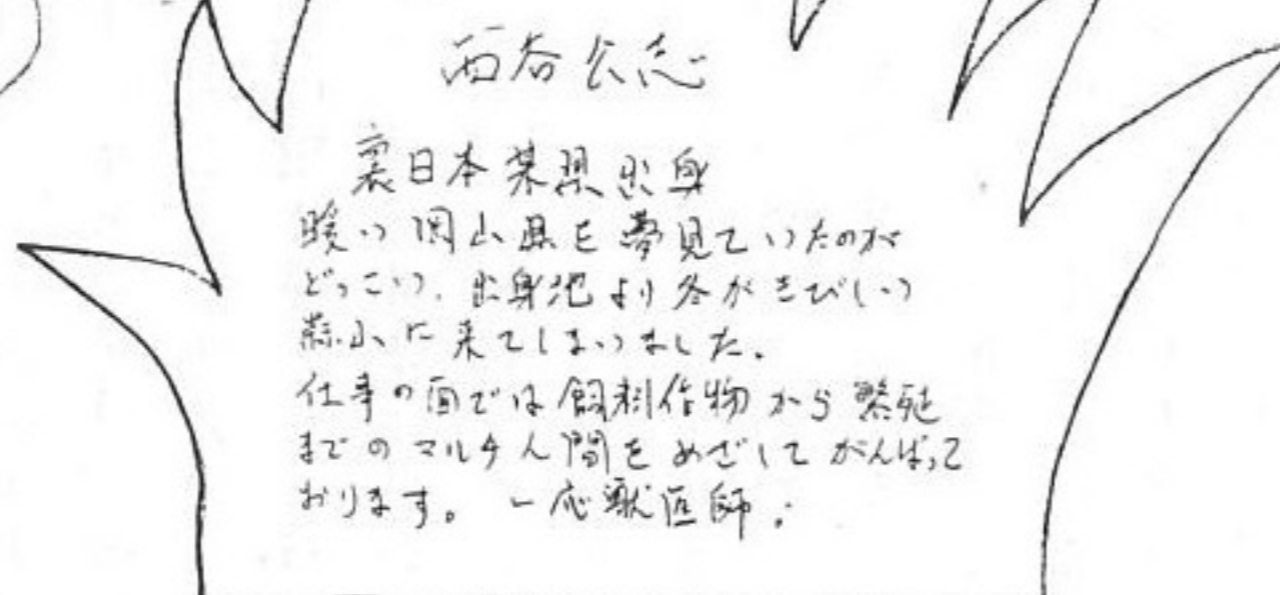
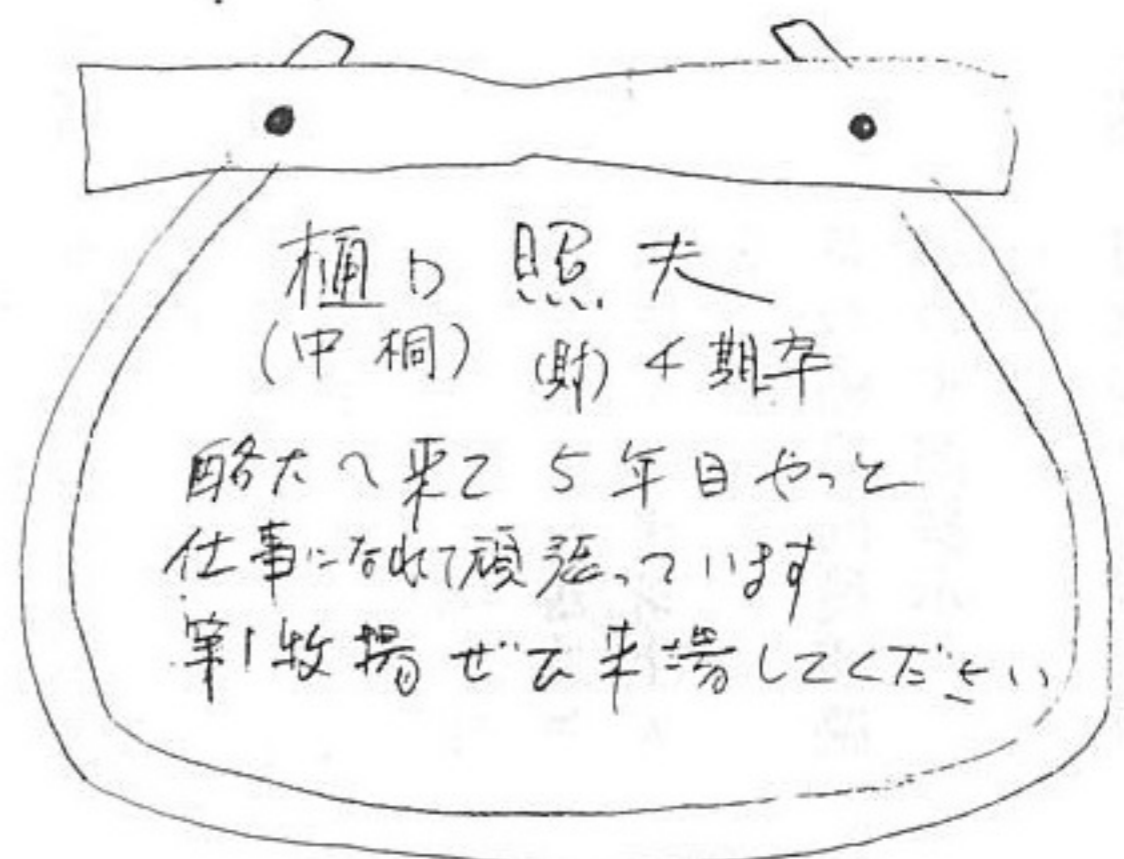
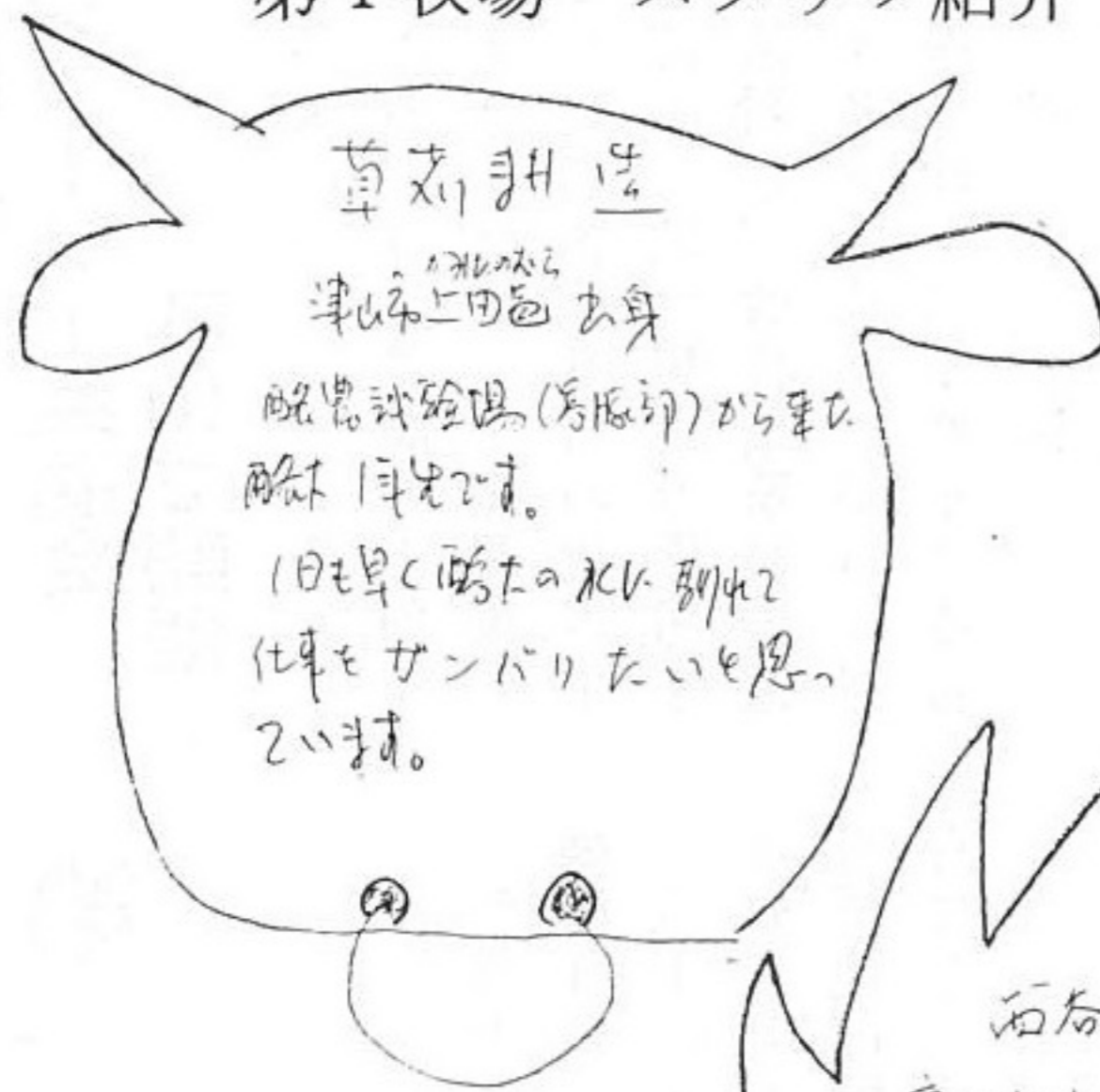
表3 月別生乳生産状況(第1牧場)

(単位:kg・%)

区 分		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
総乳量	57年度	16,055	20,324	17,798	17,880	16,769	14,598	12,826	11,939	12,045	14,141	15,101	18,910	188,393
	58年度	19,119	21,556	19,648	19,360	16,212	15,960	15,412	13,850	14,515	12,893	12,330	16,492	197,357
	前年比	119	106	110	108	97	109	120	116	121	91	82	87	105
り平均乳量 日一頭当量	57年度	18.1	20.9	17.8	17.9	16.9	14.9	14.9	14.6	15.0	17.4	19.6	19.6	17.4
	58年度	19.8	21.3	20.2	18.9	16.9	17.8	16.5	16.4	17.2	17.4	18.2	20.6	18.4
	前年比	109	102	113	106	100	119	111	112	115	100	93	105	106

五月十日に播種しました。また、五十八年度の放牧開始は、四月二十五日でしたが、今年度は、五月十一日から開始しています。最後にありますが、卒業生の皆様の御健勝と御活躍をお祈り申し上げると共に、職員の自己紹介をします。(下記)

第1牧場 スタッフ紹介



第二牧場

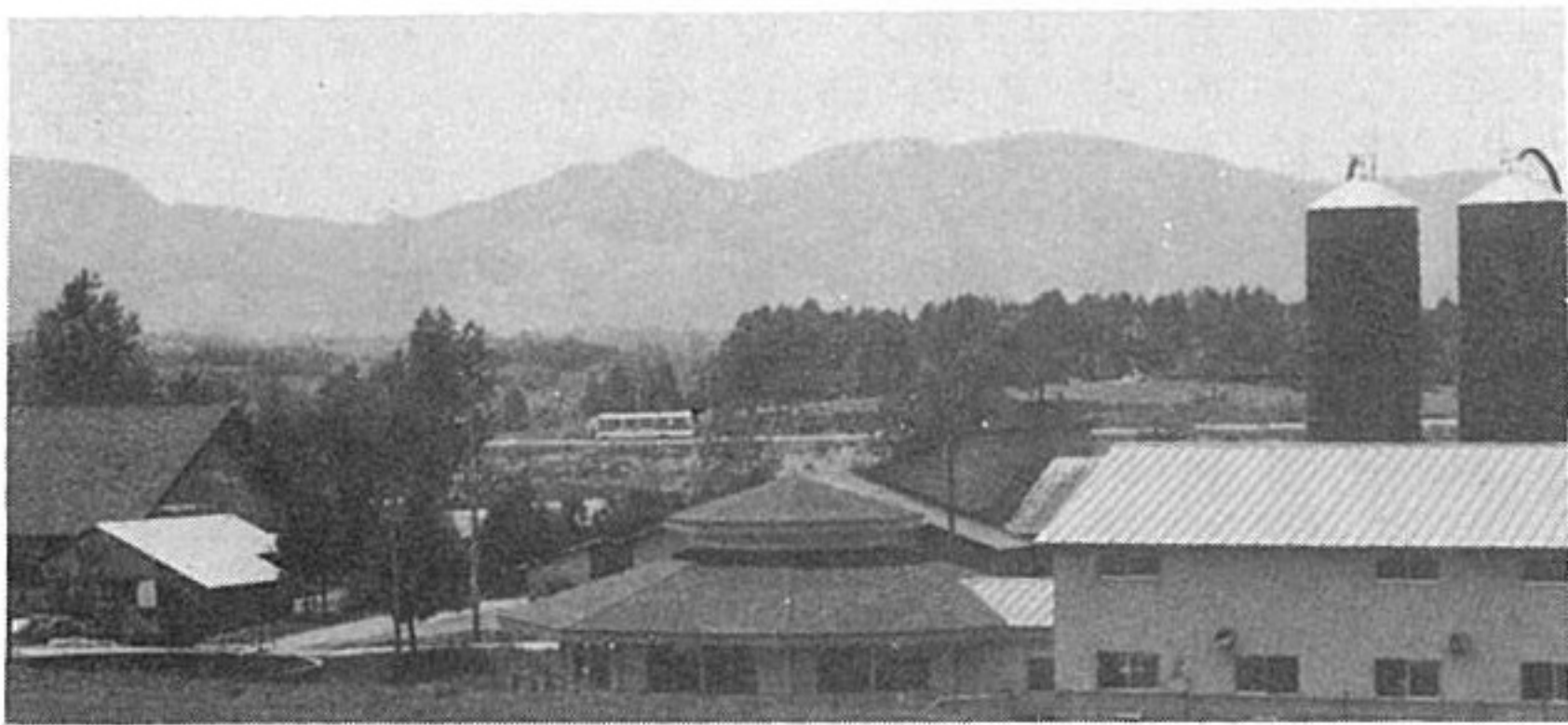
だより

記録的な大雪も次第に消え、今では大山の谷間に残るだけとなりました。第二牧場周辺の草地も日毎に青色を増し始めた今頃です。しかし、雪による被害のため、発育がいつもより半月以上遅れているようです。

さて、牧場の現況ですが、先ず職員から。

一、職員について
職員は五十八年度から引続き変わりなく、六人全員が一丸となって、豪雪の後遺症と人手不足に立ち向かっております。十七期以前に卒業した方には、訓じみのない職員が多いと思いますので、簡単に自己紹介させていただきます。(別記)

二、ジャージー牛飼養状況
昭和五十九年四月一日現在の飼養状況は表一のとおりです。頭数的には大した変化はないですが、肥育牛については、ホルスタインからジャージーの肥育へと切替えております。



第 2 牧 場

三、牛乳の生産状況
昭和五十八年度は、種付や飼料作物の生産が順調で、乳量も増加しました。

四、自給飼料の生産
一牧区から十七牧区までを従来通り、放牧や、乾草、サイレージ等に利用しています。今年は豪雪の為、牧柱が折れ曲ったり、雪の重みで沈んだりしており、牧柵張りには特に苦勞しております。

五、肥育牛の現況
昭和五十四年度から始まった、低コスト肥育牛促進事業も今年で五年目を迎えます。

表 1 乳牛飼養状況

(昭和59年4月1日現在)

区分	成 牛				育 成 牛				合計
	搾乳牛	乾乳牛	未經産牛	小計	12~18ヶ月令	6~12ヶ月令	6ヶ月令未満	小計	
雌	78	17	16	111	12	12	6	30	141
雄						2	10		20
計	78	17	16	111	20	14	16	50	161

(註) 乾乳牛には飼直し牛を1頭含む。

第 2 ジャージー種成牛の年令別構成(未滿産牛を除く)

(単位:頭・%)

出生年次	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	合計
頭 数	2	3	3	4	7	8	12	10	13	18	13	2	95
比 率	2	3	3	4	7	8	13	11	14	19	14	2	100

今年にはジャージー牛の肉利用を行なう為に、年間十八頭の雄子牛を、哺育から出荷まで全て牧場で行なっております。以上、第二牧場の近況についてお知らせしましたが、今後更に牧場の発展と充実のため場員一同ますます努力して行くつもりです。

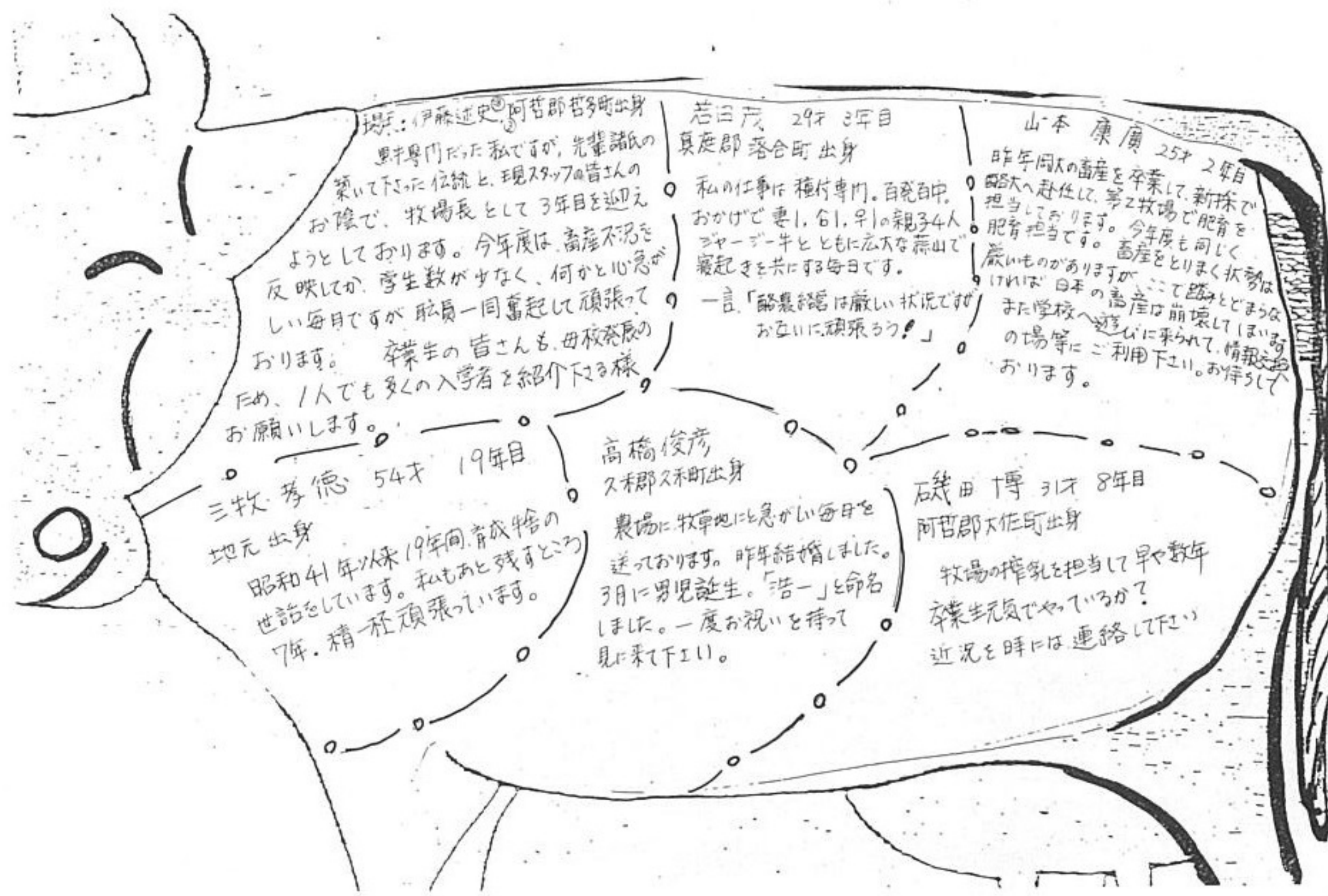
卒業生の皆さんも蒜山にいられたら気軽に御寄り下さい。

表 3 月別生乳生産状況

(単位:kg・%)

区 分	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	
総乳量	57年度	23,617	32,549	30,843	32,274	28,959	23,541	24,306	26,509	27,863	28,678	22,645	26,383	328,167
	58年度	24,588	33,594	34,922	33,088	28,626	29,366	29,384	25,239	25,022	27,794	28,856	29,146	349,625
	前年比	104	103	113	103	99	125	121	95	90	97	127	110	107
一平均頭均当乳り量	57年度	9.5	12.7	12.0	12.2	11.4	10.9	10.8	11.3	11.8	11.7	10.8	12.4	11.5
	58年度	11.7	14.8	14.8	13.9	13.0	12.6	12.3	11.7	11.1	11.1	12.8	12.1	12.7
	前年比	123	117	123	114	114	116	114	104	94	95	119	98	110

第二牧場 自己紹介



第八期生卒業後十周年記念

同窓会に出席して

社団法人 家畜改良事業岡山種雄牛センター
元副校長 永 井 仁

今年一月十四日、「至急」と書いた一通の往復葉書が舞い込んできた。

発信者は、昭和四十九年卒業の第八期生の西山喜己君で、同窓会への招待状だった。

その瞬間に私の記憶は遠い昔へと溯って、私が酪農大校へ赴任した昭和四十八年当時の酪大を想い起こし、早や十年以上になるのかと思いつつ、彼等の幼な顔(?)が浮かんで来た。四月五日の入学式が終って、ふと気がついてみると新入生とは違った雰囲気の新入生と違う学生四、五人が(第十期生以前の方々はご存知のあの汚ない独身寮に)とぐろを巻いていた。聞いてみると、校内研修で学校に帰ってきている八期生だのと、これが私と八期生との最初の出会いだった。

八月の集合研修で八期生の大体の様子がわかり、十月になると、後期の校内学習のため八期生が学校に帰ってきた。前任者から「八期生は自営

な複雑な気持ちだったことを覚えていた。

私が最初に送り出した卒業生だった。

卒業してから十年経てば、家庭の大黒柱、そのうえ今年は例年にならない豪雪、場所も四国の高松から考えて、出席者はそんなに多くは来れないだろうとは思いつつ「何人でもよい元気な顔に一人でも多く会いたい。」と早速に出席の返信を投函した。

集合の日は一月二十一日十五時、場所は高松市の栗林山荘、自宅を少し早目に出て高松見物でもしようと思っ海を渡ったところあいにくの雨模様、仕方なく山荘へ直行した。

ロビーで本を読みながら誰が一番早く来るかなと期待している、少し音程の高い聞き覚えのある声だったので、顔をあげると学生時代から見馴れていたスポーツ刈の頭の岡山の小竹君だった。近況を聞くと、幼い子供二人を残して若い奥さんを癌で失ったとのこと、「暫らく酪農を続けていたが一人では無理なので、今はプロドライバーをしてい

るが最終的には酪農は出来な

悲しみを乗り越えて明るく話をしてくれた。心中察するものがあるが、「元気で頑張れよ!!。」と励ますより外になす術もない。

思えば卒業して間もなく不慮の自動車事故で若い命を失った広島久茂谷君、久茂谷君の卒業を待って居られたご両親のお気持ちが偲ばれ、この十年間にはさまざま人生ドラマが繰り返されたであろうことが想像される。

次に香川の野崎君が三時前に現われる。今日の幹事長の西山君は学生時代から熱心な創価学会の信者で二泊三日の日程で山梨の本山にお参りしており、三時までには到着できないので代りに受付けにきたとのことだった。現在はご両親と酪農と野菜の複合経営で頑張っているとのこと、学生時代は無口で頑張り屋だったが少し弱々しい感じがあったが、今は逞しい経営者に成長して頼もしく見える。

三人で賑やかに話していると、徳島の中井君がやって来た。中井君とは、彼の自宅へ何度か行って会っている、気がよく知れており、四人になり話は更に弾む。

高知の夕部君が来ると言っ

ていたのに、一番良い牛が産で来れない、とのこと今から来いと電話しようということになり、四人で代わる代わる電話する。

そうこうするうちに幹事長の西山君が三つ揃いを粋に着こなして玄関から入って来る。入れ替わりに野崎君が搾乳に帰っていく。西山君は小豆島で酪農とニクスの栽培をしており、以前アメリカへ一年



昭和48年当時の大学全景

間実習生として行った時、一年の長い間一言も英語をしゃべらなかつたという逸話の持主であり、年令的には若いのに、一つの信仰を持っているということは立派なことであると思う。

次に騒々しく入って来たのが、寮長だった岡山の松本君と福本君、両君とも酪農専業者、間もなく岡山の福山君が現われる。トレードマークの野球帽に五センチ以上伸びた山羊ヒゲ、彼は旭東畜産公社で育成の仕事をして十年、料理の名人でテレビで毎週土曜日の午後放映されている「料理天国」という番組へ一度出てみたいと皆を笑わせていた。

十二時に岡山の石川伸一君と合流して、やって来る予定だったが伸一君がどうしても来られないということで、残念がっていた。

想い出話に花が咲いているところへ、電話、学生時代

「電話魔」と呼ばれていた広島島の片岡君からだだった。「豪雪で峠を越えるのが困難だ。」ということ、代わる代わるそれぞれの言葉で旧交を温める姿が楽しそうであった。

最後に香川が多田君と搾乳を終えた野崎君がやって来た。

多田君も専業経営者で婚約者も決まり明るい顔をしていた。常連の岡山の矢谷、福島章君達が見えないので聞いてみると、岡山の高村君の結婚式のため出席出来ないとのこと、みんなで祝電を打つ。

やっと会食が始まったのは六時半、幹事長の西山君から美土路さんと常守さんそれから三牧さんに案内したが、美土路さんと常守さんはご病気の為、三牧さんは仕事の都合で参加出来ないとの返事があった、との披露をはじめ欠席者の連絡のあったものについて近況の報告と返信の朗読があり、それについてわいわいが

やがや・・・
集まったのは合計九名だったが、賑やかな宴会が始まった。

残念だったのは校歌を誰も知らないことだった。みんなの心を結びつけるのは校歌や、寮歌で、学校を懐かしく思い起こすときには唱和していただき、今後は是非とも覚えて卒業して貰いたいと思った。カラオケで鍛えた喉で、宴会はいやがうえにも盛り上がり、なかでも素晴らしかったのは、あの顔(失礼)では想像出来ないような美声の持ち主の福山君が残念ながら仕事の当番でどうしても岡山へ帰

らなければならぬと、一滴のアルコールも口にすることが出来なかったが、ジュースで得意の歌を聞かせてくれた。段々とエスカレーターしてしま

い、「こんな楽しい会に集まりが少なかったのは寮長の責任だ。」との声も出たが、今さら寮長でもあるまいと思われるが、この夜だけはあの昔の汚い寮(とくに寮長の松本君の部屋は汚なかったが)の生活に完全に戻ってしまった。いつ果てるとも知れなかった。小人数の会だったが、本当に楽しい夜。

かつて我が酪農大学の卒業生が中・四国の酪農のリー

ダーになるのだと提唱したが今やまさに、その時代が到来しつつあると思う。同級生だけでなく、先輩、後輩が手と手を携えて仲間の輪を拡げ絆を強くして、中・四国否日本の酪農をリードしようではありませんか。

校 歌

作詞作曲 水野康孝

一、 蒜山の野のはて遠く
 仰げば高し大山や
 見しよ紺碧の空のもと
 旗ひるがえす我母校

二、 平和の鐘の鳴り出ずる
 若き世代の朝ぼらけ
 望み燃え立つ酪農の
 道は我らと共にあり

寮 歌

作詞 惣津律士

一、 緑したたる陽春に
 ジャージー遊ぶ蒜山の
 文化の香りいや高く
 学園したいて我は来ぬ

二、 流れは清し旭川
 北斗の星座仰ぎつつ
 固き決意の若人は
 誇りと栄を歌うなり



8 期 生 全 員 + α

酪農ギヤルの学園日記

第十八期卒業生

坪井 恵子

私の家は、サラリーマンで、農業、いわんや、酪農については全く無関係な家庭で、私はそんな中で十七年間育ちました。

そんな私が、中国四国酪農高等学校へと進むきっかけとなった理由は、高校三年生の初夏、そろそろ就職先を決めようという時（私はその就職先に少の不満があり、そのことは両親もうすうす感じておりました。）でした。

ある日、父が新聞を持ってきて「お姉ちゃん、オランダに行ってみないか？」と言うので、ビックリして新聞を読んでみると、十八歳以上で未婚者の男女を対象とした『ワーキング制度』とかいう、一年間オランダへ渡って仕事ができる制度の事が簡単に書いてありました。

外国の広い広い牧草地で、牛達が、のんびりと青い草を食べ、青い草の上でのんびり牛を見ていられるといいたるうなあと、思っていました。

今でも、天気の良いポカポカした日に、草地を見ていると気分が柔らかく様です。最初一年間だけという約束で、両親は、修業のつもりで（今でもそのつもりが、大きいようです。）すすめていましたが、ある日せめて基礎だけでも学んで行った方が、向こうへ行って楽ではないか、それでは岡山にある酪農高等学校へ行き、勉強してから行っても遅くはないのではないかと、説得され「それでは、勉強してから。」

と思ひ直し、又全寮制という事にも魅力がありました。親元を離れて生活をしたことがないので、それに、団体生活を試みるのも一つの人生勉強（修業）になると、両親にも勧められるし、自分でもいつまでも親元で、甘えていてはいけないと思ひ、修業のつもりで酪農高等学校へ入ることを決意しました。

私は酪農高等学校が、どんな学科を講義しどんな実習をするのか……という不安と希

望で一杯でした。
九月には、最後の決意をする為に、学校へ見学に来ました。

来てみて、驚いた事は、二牧でのパーラー、それに先輩の「来いよー!!」の声で後をついてくるジャージー牛。おまけに「私が一番に搾ってもらいのよ。」とばかりにパーラー内のパドックに入ってきた順番待ちをしている事で、牛ってわかるんだなあ、可愛いなあ、と思ひ、ここでやってみようと心に決めました。

そうこうしている間に、月日が過ぎ、搾乳も何も知らないうちに、入学式を迎えました。

これから私の酪農ギヤルと

しての毎日が始まりました。一番最初の仕事は、二牧でのジャージー仔牛への哺乳でした。その月は、分娩が多く、哺乳頭数が毎日のように増え



ていく中、慣れない手つきの私はみんなの手を取り、又下痢を出してしまったりで、早急に忙がしい思いをしたものでした。

牛飼いは、のんびりしているものと決めつけていた私は、こんなにも忙がしいものかと内心ガッカリしてしまいました。

日が経つにつれて、少しずつ哺乳も早く終わる様になって、そのうちに温度の低いことや高い乳を飲ませると下痢をすることも、又生後間もない仔牛にガブ飲みさせても、下痢になること等々、少しずつわかってきました。

この頃の私は、ただ、ただ一心で毎日を過ごしていました。慣れない土地、生活、仕事で、寮に帰ると、もう毎日がボタンキューの連続でした。一カ月もすると、搾乳や哺乳、エサ給与も一通り順番が回って来て、だんだんと慣れてきました。

いろいろな失敗もしましたが、先輩がそばについて一つ一つ指導してくれたことを、とてもうれしく思いました。

先輩とは、いいものですね。この時、私も後輩を持ったら、「先輩」と言って慕ってもらえる良き先輩になろうと思いました。

とにかく、それからの六カ月間は、私の知らない、初めて体験する事ばかりの毎日でした。青刈り、トウモロコシの播種、乾草、トラクターの運転、鎌、コーンサイレージの詰め込みと……。青刈りでは、ホークで寄せてトラクターに積む作業が苦痛でした。

そうこうしているうちに、基礎作りの前期も終り、大きな人生勉強になった校外研修が始まりました。

全く無関係の酪農家へ入り、その家族と一緒に生活をし、作業、生活習慣を学び、人と人との触れ合いを感じ……。とてもとても言葉では言い表わせない程厳しいものでしたが、この最初の研修が、私にとって忘れることのできない一つの大きな出来事でした。ここでは、酪農に関する事より「人間」という者を少し

知ることができたように思えます。

もちろん「牛飼い」についても初めて出た研修という事もあり、いろいろな事を学びました。トラクターの運転もその一つで、トラクターに乗れる様になってからは、畑の仕事が楽しくてたまらなくなりました。トラクターに乗っている時には、誰にも干渉されずに、自分の思いのまま運転できたからです。

こんな時、サラリーマンより酪農家の方が、いいのではないかと思えます。

酪農については、いくらでも研究し、チャレンジし、向上していく夢があると思う。

それに比べ、サラリーマンは、ある程度の枠にはめられてしまうような気がするからです。会社で、自分の考えたように仕事をし失敗すると、みんなに迷惑がかかり、会社にとっては大きな命取りになることがあるかも知れません。しかし牛飼いは、今ここで間違っても、すぐに影響が出てくるとも思われないし、気がついたところで少しずつ直していくと、なんとか、もち直すことができ、今後の向上への要因となり得るよう思

う。

酪農の苦勞も夫婦二人が、わかち合い、成功した時も二人で同じ境遇で喜び合えるということは妻にとって幸福な事だと思う。

サラリーマンだと会社の事は妻にとって全然わからないし、夫の仕事がうまくいったところで、夫と同じ気持ちになって喜ぶことは無理だと思う。私は夫と仕事を一緒にし、助け合う生活にあこがれています。

話は飛びましたが、研修先でいろいろ学び、私は酪農への考え方が変わりました。実は学校へ入った当時、肉体労働がきついたので、絶対酪農を一生の仕事にはしたくないと思っていました。今ではサラリーマンの妻よりも牛飼いの「お母ちゃん」にあこがれています。

今のところ、私は女二人の長女である為、牛飼いを絶対にすることは言えませんが、できることならば、将来、牛飼いの道へ進みたいと思っています。

私の将来の夢は、大規模経営ではなく、三十頭位の、夫婦二人でもやっていけて、一人が用事で外に出ている、普段通り作業が進められる、そういう牛飼いがしたいのです。

酪農家同志の交流も盛んであるといいなあ、欲を言えば、放牧形態が希望です。これは昔からの私の牛へのイメージでしたから……。のんびりと牛に運動、昼寝、牧草を食み、させてやりたい。まだまだ、勉強不足ですが、やはり牛が、大好きです。夢が現実になるよう希望します。



大学校日誌 から

・四月五日
第十九期生の入学式挙行。
入学生は十八名（うち女性三名）で、二年間の学園生活に踏み出した。



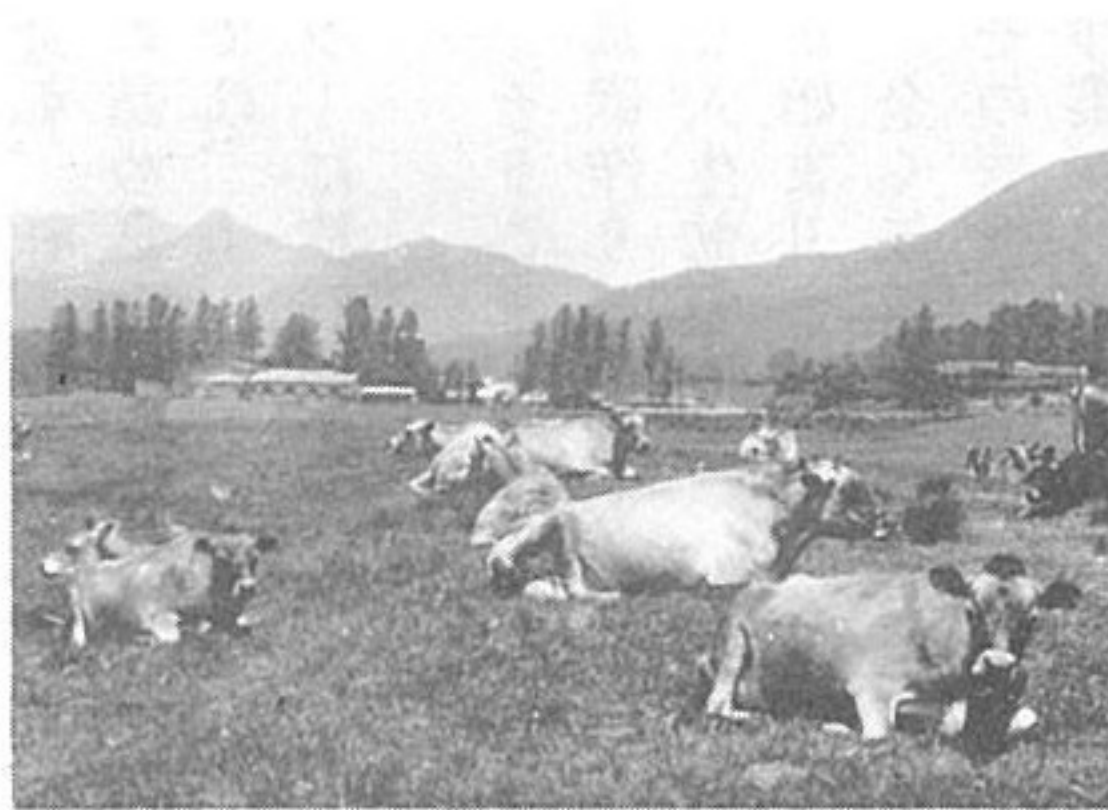
授業スナップ

・四月八日
学生同志と校内研修生及び職員相互の親睦を図るため、ソフトボール大会を開催した。いつもはミルカーを掛ける手にバットを持ち、汗を流しました。



新入生対職員チームの対戦

・四月十五日～十八日
蒜山地区バレーボール大会に出場。一勝三敗で第四位でした。チームワークが今一步。
・四月二十五日
第二牧場、ジャージー放牧開始、牧草の生育も良く、牛さん幸福そう。



第2牧場放牧風景

・四月中旬～五月
毎年恒例の牧柵張り。



オーイ遊ぶな!!早くやらんか

・五月一日～九日
第一、第二牧場、乾草収集。天候が良く、牧草の生育も良好で、牧場職員ニンマリ。



第1牧場乾草の収集

・五月
酪大は今春一色。
体育館横の桜が満開、「天皇お手植の松」隣の畑に植えてあるスズランも香り高く、清素な花をいっぱいつけました。



体育館横の桜



スズラン

・五月六日～十日
第一、第二牧場トウモロコシ播種。播種面積は一牧五・四ヘクタール、二牧七ヘクタールです。



第2牧場トウモロコシ播種後の種子被覆

・六月二十四日
講義の「乳牛改良」の一環として、乳牛審査実習を実施した。



審査実習

・七月十三日
蒜山登山挙行、絶えて久しかった蒜山登山を前期学生十八名と職員（西谷、磯山両部長他七名）で登破しました。快汗!!



上蒜山の頂上にて

・七月二十八日～二十九日
乳牛動態調査を一牧第四牧区で実施した。

・八月二十四日～九月十日
第一、第二牧場でトウモロコシのサイロ詰め作業。



第1牧場のトウモロコシ刈取り作業

- ・九月二十九日 前期終業式
- ・十月三日 後期始業式
- ・十一月十七日 大型（農耕）免許試験
- ・十二月二十八日 閉講式
- ・一月十八日～二月四日 家畜人工授精講習会開催、十六名受講
- ・二月二十八日 スキー大会。本年は記録破りの大雪で、スキーヤーにとっては絶好の冬になりました。そこで学生を引率して、一日スキー大会を百合原スキー場で実施しました。本当に楽しい一日でした。



スキー大会スナップ

- ・三月八日～九日 家畜人工授精師免許試験実施。十六名全員が合格しました。
 - ・三月二十七日 卒業式挙行。十六名が希望に胸をふくらませて、実社会へ巣立ちました。
- 社会に出てからも、畜産関係の方々、先輩の皆さん、どうか暖かい御指導の程よろしくお願ひします。

昭和五十八年度（第十八期生）
卒業生名簿

人の動き

昭和五十九年四月一日付けの定期異動で、次のとおり諸先生の異動がありました。

退職者

校長 三村 剛
調理技術員 戸田 道子
転出者
教務課長 大石 俊之

転出先 岡山県倉敷環境保健所

現職員名簿

（五十九年四月一日現在）

校長	石田 正之	技師	中山 敏之
次長	石原 健	技師	野口 竜三
部長	西谷 勝男	技師	草刈 耕造
主任	渡部 哲矢	技師	西谷 公志
主事	津田 清子	技師	樋口 照夫
運転技術員	池田 富幸	技師	伊藤 藤史
調理技術員	道祖 夕カ	技師	若田 康茂
部長	磯山 旭輝	技師	山本 康廣
部長	磯山 旭輝	技師	三牧 孝徳
部長	磯山 旭輝	技師	高橋 俊彦
部長	磯山 旭輝	技師	磯田 博

昭和五十八年度（第十九期生）

入 学 者 名 簿

昭和五十九年度（第二十期生）

入 学 者 名 簿

意向調査の実施

本校開校以来二十三年経過しました。酪農大学の今後のあり方について検討の時期にきていると思われれます。各地で活躍中の卒業生の中から抽出して意向調査を同封のハガキで実施しますので該当者の方は回答願います。なお建設的意見があればお寄せ下さい。

編集後記

卒業生の皆さん、お元気で活躍のことと思います。

本年は記録的な大雪で、慣れない除雪作業には閉口しました。そのおかげで春の到来には感無量の想いがしました。「学園だより」も本号で十六号を発刊するはこびとなり、楽しく読んでいただけるように工夫しました。

これからも皆さんと我が学園の連繫を深めて、編集内容を充実したいと考えていますので、御寄稿や御意見をお願います。

又、来年本校は、創立二十周年にあたり、記念行事を計画中であります。卒業生、関係者の方々の画期的なアイデアを募集しておりますので、多数お寄せ願います。